

【研究ノート】

近代村落地主の作庭記 —矢田貝顕造日記を読む—

田中宏夫

はじめに

鳥取県では2004(平成16)年から県内に所在する庭園の悉皆調査を実施してきた。これは、国や県の文化財指定を目指す前提としての庭園の個別調査である。調査開始時点で、県内ではすでに国指定名勝3件、県指定名勝12件の庭園が指定されており、悉皆調査の対象庭園は129件であった。

この調査の過程で、矢田貝氏の庭園(写真1、写真2)が注目されることとなった。矢田貝家の土蔵に眠っていた膨大な資料群の中から『矢田貝顕造日記』があらわれたのである。それは、1928(昭和3)年から1974(昭和49)年に亘って、第4代当主・矢田貝顕造によって書きとどめられた日々の生活誌である。日中戦争から太平洋戦争に至る戦時下の中で、顕造は庭造りに没頭して行く様子を自ら克明に書き記している。庭園築造という行為は限りなく私的行為であり、作庭者の芸術的、哲学的精神が露呈されるものである。そのため、庭園築造に関する記述が詳細に残されるというのは極めて稀のことである。

本稿は、このように庭造りにはまり込んで行く顕造の心の内を、日記を通じて覗きこむことで、秀逸な庭園が生み出された過程を明らかにし、矢田貝氏庭園を鳥取県庭園史上において価値付けることを試みるものである。具体的には、1928(昭和3年)から1941(昭和16)年までの『矢田貝顕造日記』の記述をもとに、作庭に関する事柄を時系列でたどってみた。この時期は、矢田貝氏庭園がほぼ出来上がった時期でもある。

1. 1928(昭和3)年

このとき顕造は23歳であった(11月13日生)。この頃の顕造には、後年みるような「道具狂い」の姿はみられない。正月には一般家庭にみられるようなカルタやトランプ遊びを家内や近所の友人達としていたようである。ただ、日記には以下のような独白が縷々と綴られている。

- ・今夜ハ定メシ眼ガ合ハザルベシ(1月30日)
- ・夜ハ一入り寂シ、又々大菩薩峠ヲ読ム(2月1日)
- ・夜寂シケレバ儀一、一男兩名宿リ呉レタリ(2月2日)
- ・夜ハ浸々ト更ク。奥ニテハ尚笑声シキリナリ。就寝十一時。床中大菩薩峠ヲ読ム(2月6日)
- ・夜ハ無数ノ星高天ニ燦然タリ(2月18日)
- ・今更小生ノ短慮ニ腹立タシサヲノミ覚ユレ、人ヲウラムコト更ニ更ニナケレ(2月22日)

写真1 矢田貝氏庭園(表庭)



注：二階堂行宣撮影(2011年4月18日)。

写真2 矢田貝氏庭園(露地)



注：二階堂行宣撮影(2011年4月18日)。

- ・種々我家ノコトヲ思ヒ廻ラシテ三時頃迄モ目合ハザリキ(2月26日)
- ・朝日ノ上ル前ノ山河ノ風景ハイト美シキ眺ナリ(7月6日)

この頃の顕造は寂寥感に苛まれていたようである。夜の読書では『大菩薩峠』を愛読していた。これは虚無に取りつかれた剣士、机龍之介が主人公のベストセラー小説であった。また、この頃の顕造は、すでに存在していた裏庭に花壇を作って楽しんでいた。

- ・後庭ニ花畑ヲ作ル(4月5日)
- ・上野ノ亀来リ。大内ノ山ニ松ノ木アリ面白キモノナレバト大ニ奨ム(5月18日)
- ・一昨日契約セシ松ノ木ヲ大内地内大谷ナル処ヨリ持帰レリ、前庭ニ植エシム古キモノナリ。西伯父ニ方向ナド見テ貰フ(5月20日)
- ・後庭ノ葡萄ヲセン定ス(6月6日)

既存の庭園管理などについては、義理の伯父である矢田貝栄造（通称・西伯父）に相談していたようである。この頃から、庭園見学、景勝地探訪など庭園研究を始める。

- ・古雅ナル庭園二面セシ客間二人ヲ待ツコト無慮一時間半存余（6月21日）
- ・殆ど一日植木屋ノ仕事ヲ見タリ。夜西伯父ト植木屋ト三人ニテ十一時頃迄話ス（7月9日）
- ・立久恵見物ニ行ク。天下ノ絶景ナリ（7月15日）
- ・庭ノ造り方葉ノミ読タリ（8月18日）

そして、顕造は8月頃から裏庭の池築造計画を立て、施工に至る。

- ・種々コレヨリ池ノコトニツキ協議ス。池ニ用ラル石（平均五〇貫）百五〇許取ル様依頼ス（8月20日）
- ・本日モ相変ラズ石運ビヲナシ（中略）近頃ハ毎夜好天気ニテ明月皓々タリ次第二円クナルモ面白シ（8月25日）
- ・四人組（重、利、周、宗）石ヲ運ビ終リタリ。明日ヨリ愈々掘上ゲニ着手セシメントス（9月7日）
- ・空ノ星ノ美シキヲ歎賞シナガラ独り快キ思ヲナセリ（9月15日）
- ・先日買求シ鯉五十尾ノ内三十数尾水ニ不慣ノ為カ死セリ。惜シキコト限リナシ（9月19日）
- ・本日ノ仕事中石橋上ニテ石ヲ落シ石橋ヲ三ツニ折リタルコト限リナク残念ナリキ（9月20日）
- ・開道寺山ニ松ノ木取りニ行キタリ（9月25日）
- ・昨日持帰レル松ノ木ヲ植エタリ。又河ヲ修繕シ築山ヲ修理セリ（9月26日）
- ・大工モ石工モ本日ニテ一段落ヲ告ゲタリ（9月27日）

池の完成後は、築山に低木を植えたり、趣味の錦鯉を大量に池に放っている。

- ・池ニ放テル鯉大變元気悪シ。（中略）池ノ水ナドヲ替エテ大騒動ス。野口竹ナド来リセメントノアクナラントイフ（10月2日）
- ・池ニ入りテ水ノ加減ヲシタリナド鯉ヲ介抱シヤリタリ（10月4日）

この年の11月25日、国鉄の伯備線が全通した。この日の日記には「本日ハ殆ど汽車毎ニ子供ノ如ク飛び出デ、見タル程小生ヲシテ喜バシメタリ。実際山陰交通史上ニハ永久ニ消エヤラヌエポツクナリ」と記すほどの喜びようであった。顕造は12月1日、「十時四十三分ノ列車ニテニハカニ思ヒ立ちテ岡山ニ向ケ初メテ伯備線ヲ利用シテ出発シタリ」として、早速伯備線で岡山に初めての旅行に出かけ、弟・清茂（第六高等学校在学中）の下宿で一泊した後、四国方面

へ足をのばし、高松の栗林公園を見物、帰路には岡山の後樂園も訪れた。12月15日には新見での伯備線開通祝賀会に出席した後、琴平へ向かい、16日には今治、尾道、広島を経て宮島へ参拝、17日に紅葉谷公園や千畳閣を見物して帰宅した。思いついたら即行動の気質がみられるようである。

また、顕造に様々なものを買わせようと持ち込む人が目立つようになる。

- ・植木屋来り臯月ヲ三十本バカリ持参ス(10月12日)
- ・植木屋来タリ話ヲナス。(中略)大寺ニ庭ヲ売ル人アル由。小生ニ買ハヌカトイフ(11月20日)

2. 1929(昭和4)年

1928(昭和3)年に裏庭がほぼ完成したわけであるが、顕造はその後、近在の庭園を訪問して勉強に励んでいるようである。とりわけ四阿(東屋)に強い関心をもっていた。かなりせっかちな性格であるようで、短時日に四阿の見学をおこなっている。これが後日、裏庭の四阿として建設されることになる。

- ・岸本ニ下車野坂ニ立寄ル。(中略)四阿ヲ見セテ貫ヒタリ(2月16日)
- ・皆生ニ着後百華園ニ行キ四阿ヲ見タリ(2月18日)
- ・後樂園ニ行キ四阿ナド入念ニ見タリ(4月28日)

庭の見学が多くなるにしたがって、喫茶に関する記述も見られるようになる。この当時は薄茶を専らにしていたようである。ここで菅茶山の名前が出てくる。

- ・夜伯父坂本母美世子等と薄茶ヲ飲ム(4月4日)
- ・茶ノ湯ヲ以テ観月ス(9月17日)
- ・下場ノ二階ニテ喫茶(9月20日)
- ・谷本モ来り屏風ヲ出ス。支峰ノ屏風、茶山ノ屏風等目覚シキモノナリ(9月24日)
- ・裏座敷ヲ開ケテ、茶ノ湯ヲナス(9月27日)
- ・午前中ヨリ裏座敷ニテ茶ヲ飲ム(9月29日)

10月には、表庭の拡張工事を決意した様子が窺える。11月には工事が一段落した。

- ・表ノ露路ヲ拡張ニ決ス。又上野ノ亀ノ持来ル岩石(八〇〇貫位ノモノ)ヲ五〇、一[注：50円の表記。以下同じ。]ニテ買フ(10月13日)
- ・本日ヨリ屏ヲ(露路ノ)移転ニ取掛ル(10月17日)
- ・庭ハ形ハ殆ド完成ス(10月29日)
- ・旭谷川ノ間ノ河原ニ飛石材料ヲ見ニ行ク(10月30日)

- ・台八ニテ苔取ニ行カシム。根雨原河原ニ石ヲ見ニ行キ、少シ動カシタレドトテモ五十ヤ四十二テハ取レザル由(11月5日)
- ・本朝ハ大石ヲ門ヲ通ラセテ庭ニ搬入セリ。サシモノ大工事多シ庭築造工事ハ一先ヅ終焉ヲ告ゲタリ。完全トハ言ヒ難キモ稍々一段落セリ。(中略)夜ハ二十人ノモノ大ニ飲シ且ツ歌フ。植木屋モ久振ニ酔ヒ且歌ヒオドル(11月9日)
- ・庭ニ鶴ナドヲ配置シ呉レタリ(11月10日)
- ・亀、重利、新屋来リ籠台石請負金ヲ一〇三、一 渡ス。内外ニ植木屋一人ヲ手伝ハシメタリ(11月12日)。
- ・小生ハ茶ヲ独リニテ飲ム(12月1日)

3. 1930(昭和5)年

1928(昭和3)年、1929(昭和4)年と続いた作庭工事も次の段階へと入って、庭の手入れが重要となってくる。つまり庭を育てる時期である。矢田貝家には毎日職人、人夫達が入り出して庭園のみならず地主業の経営に従事しているのであるが、その経営の収支に顕造は長嘆息しつつ、庭園の維持管理にますます懸命になる。例えば、顕造が「草取り」をした記述は、3月17日、4月20日、5月13～14日、5月20～21日、6月4～6日、6月9日、6月16日、19日～20日、25日、7月1日、7月5～6日、7月12日、7月18日、7月22～23日、8月14日、8月28日と、計23日間に及んでいる。庭内の「河ノ砂」を流す作業も、7月22日、10月25日、11月12日、11月24日に行っている。その他は以下の通りである。

- ・雪持ナドス(1月3日)
- ・裏庭ノ河底ヲ修理ス(2月27日)
- ・昨夜大風来ル。庭ノ松ノ木ノ倒ル、モノアリ。竹垣ノ倒ル、モノアリ(3月13日)
- ・芝刈ヲナス(6月8日)

庭の追加工事も行っている。

- ・亀来リ岩ヲ買ヘトイフ(2月5日)
- ・段ノ原ニ桜桃ノ木ヲ掘リニ行ク。(中略)裏門ニ定植セリ(4月4日)
- ・昨夜掘り来リシツゲ、(中略)表ノ露路ニ植エシメタリ(4月8日)
- ・川ノ池ト合スル辺ヲ乱杭シテカザリ一段落ス(4月26日)
- ・本日モ重利宗一来リ昨日ノ続ヲナス。本日ハ池畔ノ石ヲ片付ケ北側ノ小山ノ方ヲ整理シ、大山ノ入口ノ第一段ヲ作ラシム(4月27日)
- ・本日ハ架橋工事ナリキ(5月7日)
- ・電工来リ中島(後庭ノ)ニ電灯ヲ籠ノ中ニ点ズル工事ヲナス。(中略)夜点灯ニ成功ス。美麗ナレド照明用トシテハアマリニ暗シ(5月15日)
- ・夕方踏石ヲ持参。奥納戸ニ買求メテ据エサス(8月17日)

- ・蘇鉄ヲ植エタリ(12月6日)

また、頼山陽との出会いは、後の四阿建設に至る予兆を感じさせる。

- ・初蔵ト江尾ニ山陽ノ篇額ヲ見ニ行ク。(中略)夜初蔵ト種々山陽ノ参考品ヲ持寄り十二時半過迄話込ム(7月13日)
- ・初蔵ヲ招致シテ例ノ山陽ノ額ノ鑑定ニ関シ打合ヲナス(7月15日)
- ・例ノ山陽ノ額米子ヨリ帰リタレバ托ス(8月11日)

4. 1931(昭和6)年

顕造は庭園の維持管理をしながら、茶室建築(奥納戸の先)にのめりこんで行く。茶室研究は茶室の着工後に本格的に開始しているかに見える。

- ・夜大工来リ奥納戸ノサキニ茶室ヲ作ル工事ヲ請負ハシム(5月29日)
- ・朝七時ノ自動車ニテ出米。内藤ニ行キカネテ註文中ノ「茶室と茶庭」ナル書籍ヲ受取ル(5月30日)
- ・吉長後藤ニ茶室拝見ニ行ク(7月23日)

相変わらず、庭の維持管理にも精を出している。

- ・河ノ泥流ヲナス(2月26日)
- ・露地ノ川渌ヲドス(12月17日)

5. 1932(昭和7)年

前年に続き、奥納戸の先の茶室建築に没頭し、裏庭では四阿の建築も始めた。茶室では外構工事を秋から行っている。

- ・電車ニテ松江ニ向ヒ(中略)北堀井上氏ヲ問ヒ茶室ヲ見ル。種々篤ト説明ヲ聞キ、名刺ヲ貰ヒテ有沢山荘ニ自動車ヲ駆ル(1月15日)
- ・井原覚治来リ下駄ツキヲ切りタリ。而シテ午前中ニ茶室ニ据エタリ(10月25日)
- ・井原覚治来リ蹲踞ノ穴ヲホリタリ(10月28日)
- ・立岩堤ノ下ヨリ(向側)下駄ツキヲ一挺取ル(10月31日)

井原覚治は大幡村の石工である。四阿の建築は、3月末から開始している。

- ・午後蔭ノ滝ヨリ杉ヲ取り来レリ。即チ四阿ヲ作ラン為(3月25日)
- ・大工中島ノ手伝ニテ貝塚ノ四阿屋ノ仕事ヲナス(3月28日)

- ・前ノ大工ノ手伝ニテ貝塚亭ヲ作り上ゲタリ(3月31日)
- ・桜樹八本ヲ四阿付近ニ移植セシム(4月8日)
- ・四阿ノ根太作り(8月7日)
- ・薪大工一人来リ午前中ニテ四阿ヲ終ル(8月8日)
- ・夜武知ト四阿ニテ涼ム(8月11日)
- ・夜初蔵永見西権代ト四阿ニ行キ喫茶セリ(8月15日)
- ・本日モ茶ヲ沸カシテ楽シミタリ(10月2日)

このほか、石橋(裏庭)、下駄ツキ、手水鉢、建仁寺垣、灯籠、道標などの加工・設置と、休む暇もなく働いている。

6. 1933(昭和8)年

家計をめぐる顕造の長嘆息が目立つ年であるが、その庭園観に一大転機をもたらす年でもあった。儒学者・菅茶山の四字額を入手し、それに因み表庭を「細澗書堂」と命名したのである。

- ・女中ハ居ラズ。金モナク。炭モナク。実ニ貧乏ノ極ナリ(2月3日)
- ・殆ド毎日道具屋来リ来ラザル日ハ何トナク淋シキ氣持サエス(5月28日)
- ・晴川、岸駒ノ二双幅ト茶山絹本、支峰統本四点二三〇〇、一ノ負金ニテ成立ス。負金多少多ケレドソレハ絶対的ト言ヒタレバ是非ナシ。(中略)夜ハソノ金策ニ頭ヲナヤマス(7月9日)
- ・眠ラレズ。十一時過就寝、家事ニツキ何彼ト悩ム(7月26日)
- ・本日ハ茶山ノ四字額(細澗書屋)ヲ見タリ(8月5日)
- ・茶山ノ四字細澗書堂ノ額ヲ得タリ。之ヨリ堂ヲ細澗書堂ト言ハン(8月9日)
- ・青湾茶会図録ヲ借ル(8月14日)
- ・九時頃半山先生[注:入江半山]約ニヨリ来ル。(中略)半山氏ハ小生庭園ノ図卷ヲ作ル筈(8月18日)
- ・半山氏来ル。小生注文ノ書幅即小生庭園ノ見取図ナリ(8月30日)
- ・茶山ヲ研究セリ(9月12日)

この頃から顕造は、煎茶から文人趣味の庭園を強く意識し始めたようである。竹の移植は、煎茶庭への傾斜を表わしている。

- ・煎茶式本ヲ見ル(9月22日)
- ・小竹ノ移植ヲナサシム(11月14日)

7. 1934 (昭和9年)

この年、顕造は肉親(弟・清茂と正巳、伯父・栄造)を相次いで失うことになる。しかし、失意の底にも作庭の意欲は衰えない。裏の高台拡張と四阿の建設、庭の重要な景物である大灯籠、石門柱の入手などが行われた。

- ・起床七時頃。神灯ヲ点ジ祈念ス。(中略)幸多カレト祈リツ、就床(1月1日)
- ・本日朝薬石其効ナク午前七時十五分過正巳遂ニ永眠セリ。淋シキ一生涯ヲ終ル。父母ノ慈悲ニ不接、兄ノ冷タキ取扱ニサゾ不満ナリシナランカ(1月27日)
- ・清茂 前三時前 終ニ死亡ス。二弟ヲ相次デ失ヒ全ク孤独トナル(3月13日)
- ・清水古門堂拝見ニ行ク(6月28日)
- ・愈々本日待望ノ四阿建設ニイタル(7月10日)
- ・本朝六時過米子時計屋ヨリ電話ニテ西伯父ノ死ヲ報ズ(10月2日)
- ・淀江不老園ニ金子ノ催促ニ行カントス。(中略)十五日迄延期セル代リニ石大灯籠石門柱及庭石ヲ号ノ幅物ト共ニ売渡証ニセシメテ承知セリ(11月2日)

8. 1935 (昭和10年)

前年から引き続き前庭の屏の移転工事をすすめながら、庭園の景物を充実させるに懸命な日々であった。不老園石門柱、茶台石、石橋、腰掛等である。またミカン畑の方向に庭の拡張を計画し、とどまるどころを知らない日々であった。

- ・不老園所有ノ橋井旧園内ニアリシ臥龍園石門及茶台石及付属ノ腰掛石六及臥龍梅ヲ八〇、一ニテ代金ヲ全部支払ウ(2月14日)
- ・米子小田来リテ石橋、長十二尺、巾三尺五寸位ノモノヲ一三〇、一ニテ請負ハセタリ。竣工ハ五月十日頃ノ約。(石材ハ花崗岩)(4月7日)
- ・屏ノ移転ヲ終了シ居タリ(4月8日)
- ・植木屋松江ヨリ二人八時半ノ汽車来ル。愈々待望ノ細潤園ノ拡張工事ニ着手シタリ。中ノ山ヲ取片付ケニ終始ス。(中略)松江植木屋ハ永野、福島、長田植木屋一人、重利、利一、増蔵各一人(4月12日)

ここで注目すべきは、肝心かなめの時は「松江の植木屋」を呼ぶということである。顕造が拘っていた前庭の景を引き締めるのは流れの曲線であることを理解していたのであろう。

- ・昨日持帰りシ石原ノ小松ヲ移植シタリ。午後三時頃ニハ終ル。ソノ後ハ溪流ノ形ヲ作りタリ(4月20日)
- ・庭師等ハ本日臥龍園ノ石門ヲ建テタリ。又池ノ渕ヲ作ル(4月23日)
- ・書家瓊堂来リ臥龍園額ヲ持参(4月25日)
- ・農会ノ世話ニテ小鮎四五百匹新設ノ小川ニ放流セリ(4月28日)

- ・帰宅後露路ヲ見巡ル。小鮎ノ躍動ハ面白シ(5月13日)
- ・露地ノ池ニ架橋工事ヲナス。夕方ニ及ビテ稍々思フ様ナ段取りトナリタリ(6月13日)
- ・天水石(金坂某所有)ヲ五〇, 一ニテ買契スル様依頼ス(7月19日)
- ・六三聯隊ノ第一大隊本部ノ昼食ノ為ノ大混雑トナリ庭ハ中止。午後再ビ開始。(中略) 軍旗モ拙宅ニ休即憩セラル(7月27日)
- ・小田来リ五重塔及雪見一基ノ建設ヲ請負ハセタリ(11月4日)
- ・小田石屋来リ白水河原ニ塔用ノ石材ヲ見ニ行キタリ。略々可ナリノモノアリ指定シテ帰ル(12月11日)
- ・坂口本邸ノ庭園ヲ見タルニ結構ナリ(12月27日)

9. 1936(昭和11)年

2・26事件、小作問題、自家の財政問題など悩ましいことの多い年であったが、顕造は庭園を第一にするとということにますます執着していった。

- ・寒シ。女中モ居ラズ。叔母モ居ラズ美世子ハ身重ニテ大変ナリ(2月24日)
- ・薄々ニテ不明ナレド東京ニテハ又々五、一五事件ノ如キ事変アリシ由(2月26日)
- ・昨日来人夫周旋中ノ宅野ニヨリ泉水拡張工事ニ着手シ居タリ(4月4日)
- ・川端ノ石ヲ運搬シ前中ニ漸ク現場ニ到着セシメタリ。又上野組ハ赤松ヲ露地ニ五本入レタリ(4月11日)
- ・茶苗三百五十余本持参植付ケタリ(4月26日)
- ・奥納戸ニテ庭園費用ヲ取調べタルニ昭和十年度ニハ明瞭ナルモノ(人夫賃、大工賃同上材料費ハ殆ド不明ニツキ算ヒズ、人夫賃ハ明カナルモノハ加フ)ノミニテ約一五五〇, 一 余円。本年本日迄ニテ約四七五, 一 位ニテ計二〇〇〇, 一 ノ現金ヲ出セル訳ナリ。実ニ恐ロシキモノナリ。自重セザルベカラズ(5月11日)
- ・五重塔及雪見一基ヲ持参。取ツケニ取カ、ル。細雨ノ中ヲ引続キナス。雪見ハ明日ニ残ル。五重塔ハ建設セラレタリ。素晴ラシキモノナリ(5月15日)
- ・家内ヲ督励シテ各所ヲ掃除ス。就中庭園ヲ第一トス(5月18日)
- ・小田トハ煎茶亭ノ敷石ノ請負額ヲ決定セリ(6月3日)
- ・本夜ハ明月ノ前夜ニテ皓々ト中天ニ昇ルヲ雑賀君ト二人眺メタリ(9月29日)
- ・野坂(岸本馬車屋)山灯笼用棹石持参。(六〇〇メ, 一 位ノモノ)(10月23日)
- ・趣味ノ方モ少シ中止セント考フレバ思ハ益々募ルノミ(11月1日)
- ・万事思フ様ニナラズ特ニ金錢ニ於テ然リ(12月1日)
- ・一寸大工ノ仕事ヲ見タリ。本日煎茶席ノ柱ヲ建テタル由(12月6日)
- ・伊藤茶室ノ材木ヲ見ニ行ク(12月9日)
- ・朝八時出米、黒田ニ行キ旧伊藤家茶室ニテ代金四五, 一 ヲ渡シ(中略)茶室運搬ヲ相談シタリ(12月29日)
- ・昨日商談成立セル旧伊藤茶室ノ用材及下石瓦ヲ持参セリ。(トラックニテ)夜モソノ為

二七時過ギタリ(12月30日)

10. 1937(昭和12)年

日中戦争が本格化し、日本軍が中国大陸の泥沼にはまり始めた時期である。しかしながら顕造は、家政上のことと庭園世界という泥沼にはまり込み、苦界と楽園を行き来する一年であった。

- ・庭園史図鑑ヲ見ル(1月30日)
- ・午後久振ニ煎茶ヲ独喫ス(2月2日)
- ・全ク茶三昧ニ暮ス(2月11日)
- ・茶室建築ニツキ思ヲ練リタリ。(中略)時々午後後庭露地ヲ散歩セリ(2月18日)
- ・茶室ニ火ヲ入レテ喫茶ス。(中略)少シ風流ニ氣向キ出しシタリ。自重々々(3月25日)
- ・奥納戸ニテ瞑想ニ耽ルコト多シ。山陽中心ノ書簡ヲ漸ク七八枚集メテ安心セリ(3月29日)
- ・山灯笼建設シ了ル(4月25日)
- ・掃除シテ夕闇ニ眺ムレバ又一段ト美シ。茶室ニテ喫茶(5月5日)
- ・何トナク心スグレズ(6月2日)
- ・殆ト終日ナスコトナシ。脳裡ハ種々ノ事象巡ル(6月6日)
- ・朝内田ニ電話ス。橋谷力一郎貸金ノ件、小作問題ノ件。前中茶室。午後モ同様。雨庭ヲ楽シム(6月7日)
- ・朝ハ池庭ナドヲ散歩、手入。正午ヨリ子供等ト池ノ橋(表庭園ノ)ニテ遊ブ。(中略)美世子等ハ五月節句ノ笹巻ヲ作ル。子供等大喜ヲナス。夜入浴後子供等ト庭園ニ観螢ヲナス(6月12日)
- ・午後ハ子供(淑)ニ手伝ヒテ葡萄柵ヲ作ル。夕方撒水夜ハ又々子供等ト月夜ヲ利シテ庭中ヲ散歩ス。ヨキ心持ナリ(6月19日)
- ・夜迄撒水ス。子供等ト星ヲ見ル(8月4日)
- ・夜ハ庭ノ拝石上ニテ納涼仮眠ス(8月23日)
- ・拝石ノ上ニウタ、ネス(9月5日)
- ・山陽幅ヲ見テ感アリ。煎茶ヲノム(9月7日)
- ・武信ノ露地門ヲ搬入セリ(11月5日)
- ・木崎氏〔注・木崎愛吉(好尚)〕ヨリ細潤書堂記来ル。ナカ〜ノ力作ナリ(11月19日)

11. 1938(昭和13)年

日中戦争の激化にともない、顕造の周辺でも出征者が増え、戦死も発生するなど不穏な時代となってきた。

- ・竜川仕事ニ来リ露地ノ中門脇建仁寺垣ヲ取掛ル(3月16日)

- ・本日ヨリ元伊藤茶室ノ建築工事ニ取掛ル(4月9日)
- ・本日ハヨキ日ナルニヨリ旧伊藤茶室ノ建テアゲヲナス(4月18日)
- ・美世子ト共ニ加藤叔母ニヨリ抹茶ノ稽古ヲナシタリ(5月3日)
- ・一日中不愉快ナリ。独り淋シク喫茶セリ(5月18日)
- ・俄思立チニテ松江行。(中略)普門院茶室観月庵見学ノ為ナリ。(中略)夜ハ谷本父子ヲ招キテ紅茶ニテ月見ヲナシタリ。十一時ニ及ブ。ナカナカノ月夜ナリキ(9月10日)
- ・重利来リ道標ヲ持参。『右大せん左上の村』ナリ(10月11日)
- ・午後ハ新茶室ニテ初蔵ヲ招致シテ美世子ノ手前ニテ喫茶ス。即チ炉開ナリ(10月16日)
- ・午後茶室ヲ開ケテ喫茶ス(10月18日)
- ・倉吉ニ立寄。即サキニ依頼中ノ田村幸一氏ノ道シルベヲ求ムル為ナリ(12月31日)

10月以後、新たに建造した茶室(新茶室、現・観楓庵)での喫茶が頻繁に行われるようになる10月18日、22日、11月2日、3日、18日、21日、22日、12月6日、11日、13日などに喫茶の記述が見られる。

12. 1939(昭和14)年

前年完成した旧伊藤茶室の露地が着工し、茶室を観楓庵と命名した。喫茶の記述は、1月8日、10日、13日、2月4日、20日、3月21日、4月28日、5月25日、6月16日、6月17~19日、22日、7月2日、9月27日、11月7日などに見られる。

さらに、待合の建築、畑の埋め立てと、休む暇のない日々を送る。煎茶への傾斜も著しい。

- ・茶庭ニ着工セリ。(中略)朝岩田次デ竜川、九時過ヨリ重利来リ除雪ナドニテ松江ヨリ植木ノ来ルヲ待機セリ。正午前第一便到着。永野福島搭乗。永野ハソノマ、居テ指揮セリ。岩田大工ハ露地門待合廂ノ設計ヲナス。重利、竜川ハ庭ノ間ノ竹穂垣二間ヲ外シタリ又植木運搬又三又ノ設備ナドヲ手伝フ(1月25日)
- ・植木屋等ノ仕事本日ハ飛石ヲ取付ケ初メタリ。元ノ茶室前及伊藤広座ノ分大体ニ終リタリ。竜川ヲ督シテ道標ヲ建テ了リタリ(1月29日)
- ・植木屋ハ石段ヲ大部分ナセリ。又飛石モ殆ド終了(1月30日)
- ・旧伊藤茶室ヲ観楓庵ト命名ス。(中略)夜中茶室ヲ開ケ置キテ谷本永野ト三人喫茶シテ閑談シタリ(2月5日)

5月頃からは、裏庭に建設した四阿を、表庭の南側(もとミカン畑の所)に移転することを計画している。また、観楓庵で連日のように煎茶を喫し、喜びに満ちている。

- ・山田外一名来リ石垣大分渉ル。(中略)即四阿ノ屋敷埋立ナリ(5月13日)
- ・露地門ノ屋根本日完了(6月8日)
- ・朝煎茶室ニ煎茶セント俄ニ思立チテ初蔵ヲ招致シ、又西伯母竜川、家内モ加エテ喫茶ス。

先年ヨリコノコトヲナサントテ設計シタルナレバ愉快コノ上モナシ(6月16日)

- ・新緑ノ庭ニ煎茶ヲ煮ル(6月17日)
- ・前中ニ又々煎茶席ニテ家内一同ト喫茶セリ。(中略)午後一時半過ノバスニテ米子行、石倉ニテ煎茶小道具ヲ買求メタリ(6月18日)
- ・煎茶屋ニ独楽(7月2日)
- ・朧月ニテ納涼十時頃就床(8月25日)
- ・夜ハ明月出デ、拝石上ニ臥シテ納涼(8月30日)
- ・本日ハ好天気ナリ。池ナドヲ掃除シ、久々ニ観楓庵ヲ開ケ炉ニ火ヲ入レタリ。子守傍々掃除ス。十一時過栗木来リ久振ニ中食ヲ共ニシテ庭園茶室ナドヲ見タリ。(中略)夜ハ子守ニ茶菓子ヲ求メシメテ茶室ニテぎんヲ加工美世子、淑朗ト四人ニテ月見ノ喫茶ヲナセリ(9月27日)

13. 1940(昭和15)年

日中戦争が泥沼化し、軍国主義の風潮が強まるなか、日々の生活用品も徐々に逼迫していった。その中で顕造も荒波の中に引き込まれていく。

- ・愈々前門ノ改築ヲ着工セントス(1月14日)
- ・参宮旅行ヲ決行セントス(2月12日)
- ・内宮、外宮ノ順ニ参拝ヲ終リテ、又直チニ引返シ松坂ニ泊スルコト、セリ。即国学者本居宣長先生ノ遺跡ヲ尋ネン為ナリ。時ニ四時前ナリ。松坂城趾ニ保存サレタル旧邸ヲ参観。古鈴、古文書、板割ナドヲ興深く拝観シテ宿舍松泉閣ニ引返シタリ(2月13日)
- ・靖国神社ニ礼拝ス。聖上同神社ニ御親拝ノ時ナレバナリ(4月25日)
- ・日本生命加入ト引換ニ五軒屋ニアル同氏所有ノ臥竜松ヲ譲渡サル、コト、シ(中略)譲渡証ヲ取りタリ(6月17日)
- ・夜ハ明々ノ月アリ庭中ヲ散歩ス(7月19日)
- ・久々ニ煎茶ヲ出シテ独喫茶ス。庭ノ池中ノ白蓮初メテ輪咲出デタリ。家内中見テ楽シム(7月24日)
- ・住組ノ品(配給品)ヲ分配セリ。砂糖、鹼、ハイトリ紙、マッチナドナリ(7月27日)
- ・防空演習ノ予行ニテ灯火ヲ納メテ早く就床(7月29日)
- ・日吉津石原以波保氏盆栽ヲ見ニ来ラレタリ(8月22日)
- ・女中外ニ出タガリテ気ニ入ラズ。山ヨリ帰りシニ盆栽台ニ腰カケタルヲ注意的ニ叱リタル処立腹ス。変ナル奴ナリ(9月9日)
- ・女中少シ生意氣過ギル様ニ思フ。(中略)少シモ惜シキ女中ナラズ(9月14日)
- ・女中又々生意氣ヲ言ヒ堪忍ナラヌヲ美世子ノ為ニ忍ビタリ(9月16日)
- ・本日ハ記念スベキ紀元二千六百年奉祝日ナリ。部落ニテモ一同休業。十時頃集合十一時開式。小生ノ指揮ニヨリテ天皇陛下ノ万才ヲ奉唱。実ニ渾然一体ノ気ニウタレ思ハズ涙シタリ(11月10日)

14. 1941 (昭和16) 年

太平洋戦争が開戦した年である。作庭に関する記述はこの頃になると目立たない。矢田貝氏庭園の造営が一段落したと見るべきであろう。

- ・ 紀元節ナレバ東方遙拝、君ケ代合唱 (2月11日)
- ・ 女中又マタ小生ノ目ヲヌスミテ石工ノ処ニテ話込ム。叱リタリ。割合ニ平然タリ (2月13日)

おわりに

本稿では、ここまで矢田貝顕造の作庭記録を日記によって時系列でたどってきた。その内容をごく簡略に述べると以下の通りである。

庭造りに嵌まり込むまでの顕造の心の裡には、強い寂寥感、虚無感、汚れなき自然界への憧憬があった。これを動機として、顕造は矢田貝氏庭園の造営に邁進する。矢田貝氏庭園は、いわゆる自然主義的庭園であり、文人好みの庭園であり。煎茶の庭でもあった。

作庭の発起から完成までを時系列で並べると、以下の通りである。

- ・ 裏庭の池造り：1928 (昭和3) 年
- ・ 前庭の拡張：1929 (昭和4) 年
- ・ 庭園景物の充実：1930 (昭和5) 年～
- ・ 茶室建設 (現「離れ」)：1931 (昭和6) 年～1932 (昭和7) 年
- ・ 茶庭 (露地)：1932 (昭和7) 年～
- ・ 四阿建設 (裏庭の東屋「貝塚亭」)：1932 (昭和7) 年
- ・ 裏庭の高台拡張と四阿建設：1934 (昭和9) 年
- ・ 屏の移転 (前庭)：1934 (昭和9) 年～1935 (昭和10) 年
- ・ 細潤書堂 (細潤園・前庭) の拡張工事着手：1935 (昭和10) 年
- ・ 茶室 (観楓庵) 建設：1938 (昭和13) 年
- ・ 露地作庭：1939 (昭和14) 年
- ・ 裏庭の四阿移転、表庭南方へ：1939 (昭和14) 年
- ・ 前門の改築：1940 (昭和15) 年

矢田貝家には、日常多くの人たちが出入りしていた。作庭にかかわった植木屋は、淀江、松江、あるいは大幡村、近隣の業者が多かったようである。ただし、「観楓庵」の露地作庭に際しては、松江の植木屋を呼んでいるように、ここ一番のときは、「松江の植木屋」を頼っていた。石工は米子や近在、左官も近在の人のようであった。なお、女中は米子その他から調達していた。

庭園材料については、景石は近隣の山からの調達で、石垣材、礫、砂は日野川から調達していた。植木は大山山麓から山採りし、或いは旧家の庭の古木を購入していた。灯籠、道標、水

写真3 菅茶山「細澗書堂」扁額



注 矢田貝家所蔵。

鉢など一部の景物は古物を購入していたほか、米子の石工の作品なども購入していた。

顕造の庭造りに影響を与えたのは、菅茶山による「細澗書堂」の扁額であった(写真3)。菅茶山は頼山陽の師であり、その関係で顕造は頼山陽はじめ頼派の儒者たちも好んだ。木崎愛吉(好尚)による「細澗書堂記」の執筆や、入江半山による「細澗所見図」は、顕造の理想を体現した作品であり、現在も矢田貝家に伝わっている。

茶室の利用法であるが、奥納戸の先の「離れ」の茶室は、ほとんど「独茶」として利用していた。観楓庵は親しい友人、身内などを招いて喫茶していた。多人数による茶会の記述は見られなかった。1933(昭和8)年頃までは抹茶を喫茶していたが、1934(昭和9)年、裏庭に四阿を建築して以降は、煎茶喫茶の記述が登場する。観楓庵の建設後は、連日にわたり煎茶喫茶の記述が目立つようになった。

謝辞

この文章を書くにあたって、「矢田貝顕造日記」の翻刻文を鳥根大学法文学部の板垣貴志氏に提供いただいた。また、矢田貝家の古写真他の古記録等の資料は、法政大学経営学部の二階堂行宣氏に提供いただいた。深く感謝申し上げたい。